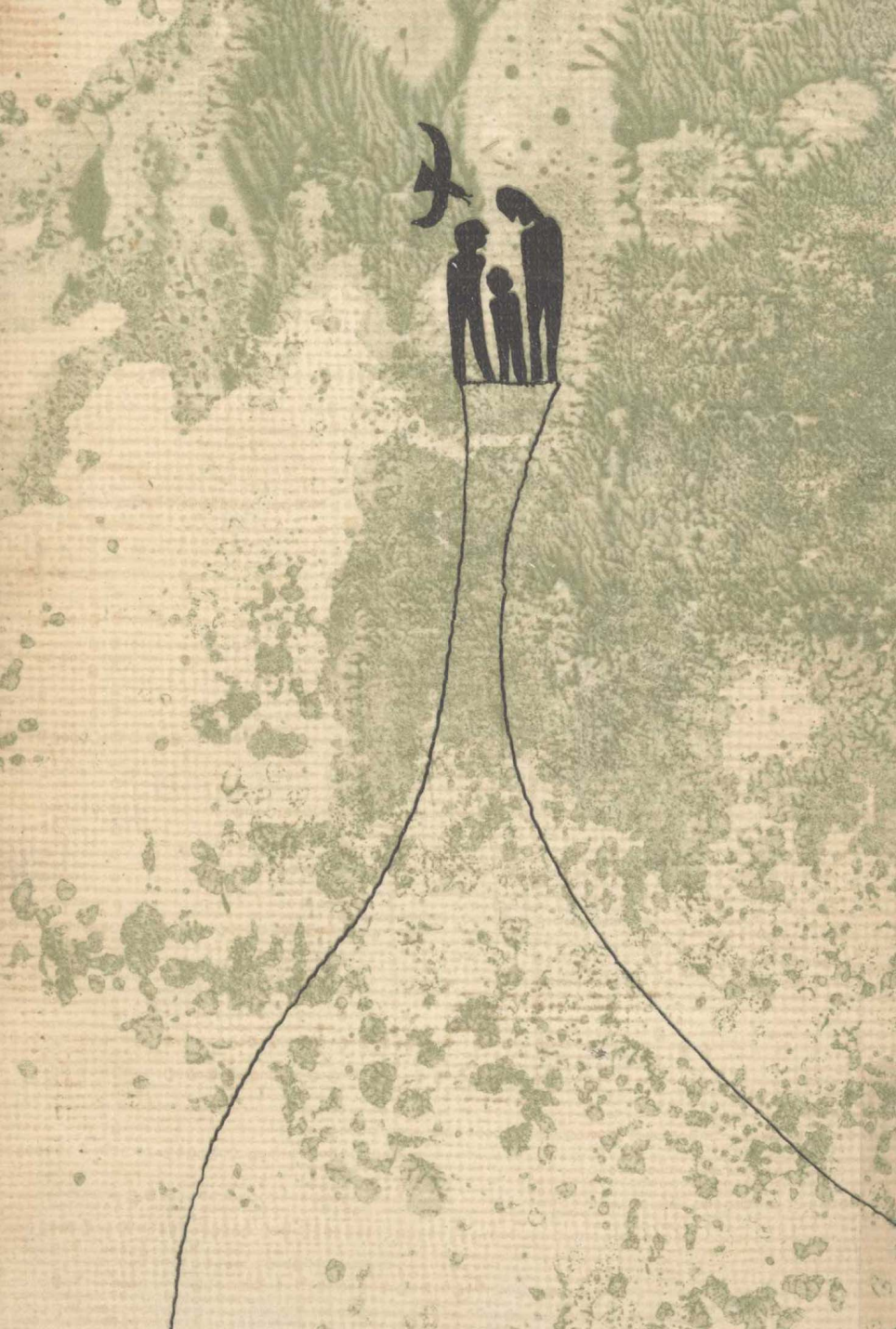
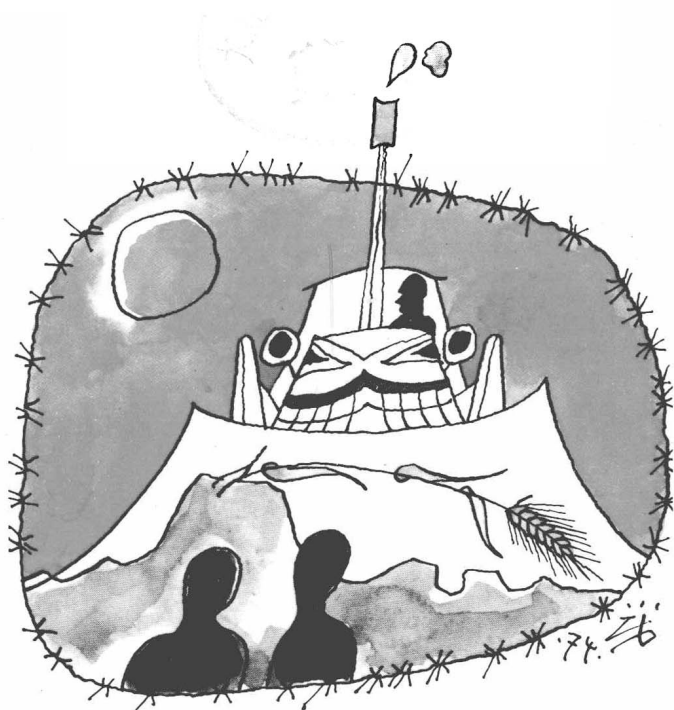




いじや

宮原昭夫



河出書房新社

どっこいしょ・えいじゃー

昭和四十九年十月二十五日 初版印刷
昭和四十九年十月三十日 初版発行

著 者 宮原昭夫

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二 電話二九二一三七二一

印刷 株式会社文弘社

製本 株式会社若林製本工場

©1974 AKIO MIYAHARA

目次

街なかの田園

水仙 69

男の日ごよみ 91

はりがみ 115

どっこいしょ・えいじゃー 147

装画·题字

田沢
茂

どっ
こ
い
し
よ
・
え
い
じ
ゃ
ー

街なかの田園

おそらく、その時、かれらが期せずしてそこに落ち合ってしまったのは、せんじつめれば二人とも、その日、なにをやったらいいのか、かきもく見当がつかなかったせいには違いない。

そこは見渡す限りの焼跡の一劃の、なんの奇もない、猫の額ほどの同様な焼跡だ。ただ、周囲には、防空壕を改造して赤錆びた焼トタンで屋根を葺いた壕舎や、敷地の瓦礫を隣の地所との境まで押しのけたあとにつくったちっぽけな菜園や、その一隅の、やはり屋根から壁までいっさいが焼トタン作りのバラックなどが目につくのに、その焼跡だけは、いまだに罹災して以来まったく手を加えられておらず、焼け落ちた瞬間のままの形で屋根瓦が地上に折り重なり、不燃物の襖の取っ手やら、割れた火鉢やら、風呂桶の火格子の一片やら、ブリキ作りの流しのひしゃげたのやらが、その間から、その一部を覗かせていることが、強いて言えばほかの焼跡と違ふところだった。ほかの地所で菜園なりバラックなりを作るときに取り除いた瓦礫の或る部分も、この未整理の地所に運び捨てにされていて、その堆積の量は、もとの分よりかなり増えてきているようだ。

それらの瓦礫の間の、ちょっとした隙間のいたるところから、旺盛な夏草たちが、まるで噴き出るような勢いで首を出している。

磯部がそこへやって来た時には、もう長谷川がその瓦礫のてっぺんに腰を下ろして、夏の真昼の直射日光を身体いちめんに浴びたまま、顔じゅうに汗の粒を浮べて、膝の上に立てた両手で顎を支える姿勢を保ったまま、身動きもせずにぼんやりしていた。

磯部に気付くと、彼はそのままの恰好で眼だけを動かして合図を送り、それから、たいぎそうにちよつと身体をずらしてみせて、隣へ坐れ、という意思表示をした。磯部も黙ったまま、そこまで歩いて行って、彼と並んで腰を下ろすと、同じように、そのままぼんやりしだした。夏の日に熱せられた瓦のかけらたちは、ズボンを透して二人の尻に、その熱をじわじわと伝えてくる。とにかく、どうにも信じようのないことが起ってしまったのだ。もし、かりにこの日本列島全体が空中に吹きとんでしまふ、と告げられたとしても、その方がむしろ、これよりもまだしも信じにくくはなく、しかもこれほど、とほうにくれることもなかっただろう。

おとといは、なにがなにやら、まるっきりわけがわからなかった。きのうの朝は、溺れる者が藁にでもするような気持で学校へ——この四月に入学したばかりの中学校へ、駆けつけて行った。すると、入学以来まだ一度もその姿を校内で見掛けたことがなかった、勤労働員で工場に出勤ちゅうだった上級生たちが、全員登校して来ていて、広くがらんとしていた校内が、にわかに狭くするしく思えだしたほどだった。その全校生徒の前で、いかめしい顔立ちの校長先生が、壇上

で訓辞の最中、にわかにと涙にむせんで絶句し——諸君とあいまみえるのも、おそらくこれが最後になるだろう。元気で、くれぐれも身体に気をつけて——と、とぎれとぎれに告げ、そして中学校は、追って沙汰があるまで当分休校、ということになってしまった。……

「そうだとすると……」唐突に、長谷川が、まるでいままで何かについて話し合ってもいたように、いったいなにが、そうだとすると、なのか、まるっきり説明しようともせずに、

「原のことは、どういうことになるんだろうな……」と言い出した。

「そうだとすると、あいつは、なぜこういうふうになっちまったんだろう。そうして、なんのために……」

たしかにそれは、この二人が、べつに申し合わせたわけでもないのに、それぞれにここへやってきて考えてみようとした、まさにその事だし、現にこうして互いに黙りこくってしきりに考えていたことなのだった。それは、ついおとといまでは、あらためて考えてみるまでもないことだった。原が死んだ理由も、その死の意味も、彼等にはあまりにもはっきりと判っていた。それは、しごく明快なことであり、あるべくしてあったことだった。ところが今日になってみると、それはもう、かいもくわけの判らないものになってしまっていた。

彼等の学級で、あの日死んだのは、原一人だけだった。しかし、この大きな都市の大半が、たった半日のうちに消滅してしまったあの日に、死んだ級友が、たった一人きりだったということに、あの当座は、むしろ彼等は、まるで狐にでもつままれたような思いがしたものだ。彼等は一

人残らず、あの見渡す限りの火の海の中をとめどなく逃げ回ったあげく、自分が生き残ったのは、まったく奇蹟としか思えなかったのだから。あの日のあとの、最初の登校日に、彼等はそれぞれ、九死に一生を得た体験談を、はちきれんばかりに胸中にかかえて、学校へ駆けつけてきた。そして、不可思議なことにそこだけ焼け残った老朽校舎の中で顔を合わせて、ちょっとしたのま、互いの冒険談を披露しかけているうちに、彼等はたちまち鼻白んできてしまつて、誰からともなく口をつぐんでしまった。彼等は、級友みんなが、それぞれ自分に比肩するような、命がけの大冒険を経験してきているのを了解したからだ。自慢話というものは、それに驚嘆して耳を傾けてくれる聞き手がせめて一人でも居なければ、成り立ちようがない。そろって生命を落しかけた級友の前で、命を落しかけた話をしてみたところで、それは、朝起きて歯をみがいた、というような話と、いったいどこが違うのか。

そんな彼等の間では、原の死でさえも、特にとんでもない大事件というほどには受けとられなかった。それは、単に荒れ果てた教室の中ほどにできた一つの空席にしか過ぎなかった。少くとも磯部と長谷川以外の同級生たちにとっては、そうだった。一つには、この春、彼等がこの中学に進学して来てから、ほんの一学期も経っていなかった事や、しかもその間に、一つ教室で机を並べて授業を受けた日は数えるほどしかなく、その上、教室の外で起きたさまざまな事件が、あまりにもめまぐるしかった事もあって、彼等にはまだほとんど同級生へのなじみが深まる余裕がなかったせいもあった。

現に、磯部と長谷川にしたところで、原を含めて、それぞれ別の国民学校から進学したこの三人は、中学入学後間もなくの学徒援農勤労働員の日までは、殆ど互いの存在を意識してはいなかったのだ。疎開で人員が減っていた各国民学校からの進学者は少く、おかげで、いちおう有名校の端くれには入っていたこの中学校の、入試競争率は低くて助かったが、その代り、同級生の中には顔見知りが極端に少く、彼等はその時まで、心細さのあまり、もっぱら他級の、国民学校同窓生とばかり接触していたので、同級生の名前さえ、まだはつきりとは覚えきれていなかった。しかし、その日、ローカル鉄道に三時間ほど揺られて、動員先の農村までたどりつき、それぞれの農家に分宿するために、駅前広場で三人一組ずつに組み分けする段になったら、彼等はいやおうなしに、自分の学級内から互いを選び合わせるをえなかった。よろず軍隊式の行動形態で、考慮したり談合したりする、いとまなどあらばこそ、いきなり先生が、

「三人組め」と口早に号令を掛け、生徒はとっさに素早く相手をひっつかまないと、一瞬遅れても、あぶれて半端人足になってしまい、みんなの面前で赤恥を掻かなければならない。

号令と共に、磯部は、誰よりも早く、めくらめっぽうに腕を突き出して、たまたま手に触れた同級生の身体をただちにひっつかみ、力まかせに引き寄せた。その時、襟首をいきなり引っばられて、うしろへあやうくひっくりかえりそうになりながら引き寄せられて来たのが、原だったのだ。めんくらっている彼に向って、磯部は、

「もひとり」と、もののしく叫ぶやいなや、獲物でも狙うような目つきで素早くあたりを見回

し、ちょうど彼の背後からなんとくこつちを覗き込むような恰好をしていた長身の長谷川の姿が目に入った瞬間、物をも言わずその腕をつかまえて、また関節が抜けんばかりの勢いで引っ張った。そろって磯部に向ってよろけ込んだ形になった二人に向って、彼は、

「なっ」と意気揚々とうなずいてみせ、二人もあわてたように、うん、うん、と、いそがしくうなずいた。磯部は、そんな二人を満足げに見回しながら、

「ひとまず、これで、よし、と」などと、子細らしく呟いたりしていた。それが、この三人が知り合うきっかけだったのだ。その瞬間から、むこうまる一カ月間、彼等は同じ農家で起居を共にすることになった。そして、彼等が農村から帰ってきた直後に、この都市は大空襲に遭い、そして原が死んだ。……

長谷川が、物思いに沈みながら、投げ出している両脚の間の瓦のかけらを拾い上げては、向うへ放り投げている。ゆっくりした動作で、所在なげにいつまでもそれを繰り返している。彼と並んで坐り込んでいる磯部は、強い日射しの中で、空中で一瞬白く光ってから向うの瓦礫の山に落ちて乾いた音をたててはねかえっては堆積の向うへころげ落ちて行く瓦のかけらの行くえを、ぼんやり目で追っている。やがて、彼も長谷川にならって、腰を下ろしている彼の身体の左右から、かけらを掴んでは両手で交互に下手投げで向うへ投げ上げ始める。表面の瓦礫は殆ど触られないほど真夏の日射しに熱せられているが、その一枚下の瓦からは、ひんやりとした感触を掌に伝えてくる。そのうち、彼はやおら自分の中のかをもてあましたように、いらだたしげに、その

両手の動きを速め、まるで速射砲のようにめまぐるしく交互にかけらを投げ出し始める。向うの瓦礫の山は、二人の投げるかけらの雨を浴びて、せわしない乾いた落下音を立て始める。

磯部が、殆どまるごと一枚の原形をとどめている瓦をつかんで、片手では無理なので、両手がかかえ上げてから、ふと目を上げると、向うの瓦礫の山のうしろから、ひさしの裂けた戦闘帽をかぶったランニングシャツ一枚の男が上半身をのぞかせて、こっちをにらんでいる。磯部と目が合うと、男は、

「こまるねえ……」 険悪な声で言う。

「うちの地所へガラクタを投げ込まれちゃあ。せっかく汗水たらして片付けたんだからな」

二人は急いで手を止めて、黙って男を眺め始める。男はちょっとそのまま二人をにらみつけておいてから、

「こんな公德心の欠けたやつらばかりいるから、お国だって、こんなことになっちまうんだ」 ぶつぶつ言いながら、向うの焼けトタンのバラックへ引き返して行く。

しばらくそのまま二人とも手持ち不沙汰にじっとしていてから、

「たかが、かけらの五つや六つ、いちいち文句つけるこたあねえだろ……」 磯部は急にむかつ腹を立て始める。

「お国が負けたってのに、瓦のかけらどころのさわぎかよ」 急に立ち上って、かけらを一つ、力いっぱい青空に向って投げ上げてやる。それは、みるみる小さくなりながら焼跡の上空をどこと

も知れず飛び去って行って、落下音さえ、聞えては来ない。

「てめえの方こそ、自分の方のガラクタを、さんざんこちへ捨てやがったくせに」

そのまま、またしばらく二人とも黙っていたが、ふと、

「しかし、このまんまにしようと……」長谷川が坐ったまま身の周りを見回しながら、

「ここは、ゴミ捨て場になっちまうぜ。このかいわいの瓦礫がみんなここへ運び込まれちまつて」

「じゃうだんじゃねえや。ここは原んちの地所だ。原が住んでたんだ。もしかしたら原のたまし이가帰って来てるかも知れねえんだ。ゴミ溜めにされて、たまるかってんだ」

「でも、あいつン家は、一家全滅で、片付け手がないから、このまんまにしておけば、おっつけそうなるぜ。現に、ここへ来てみるたんびに、瓦礫が増えてる」

「片付けようや、二人で」磯部が叫ぶ。

彼がそのような提案をし、そして長谷川がそれに同意したのは、つまりはその場の行きがかりというものだったとしても、しかし、しょせんそれは、その時の二人が、自分たちはなにをやったらいいものか、かいかく見当もつかず、しかも、なにもしないでいると、どうにも堪え難いほどの不安が襲ってくる、という、いきなりつかえ棒を外されたような心境におちいついていたせいだったにちがいない。

その日から、二人は毎日、朝食が済むと、ただちにこの焼跡に出向いて来て、瓦礫の取り片付